

「ロービジョンケアの現状とこれから」

大阪大学 森 本 壮

ロービジョンは、矯正後の視力が十分であっても視野狭窄や羞明、両眼視機能障害などによって日常生活に困難を来す状態を包括的に指す。治療で改善が困難な場合、残存視機能を最大限に活用し、補助具や環境調整を組み合わせることで生活の質を維持・向上させることがロービジョンケアの目的である。

本講演では、まずロービジョン患者の心理過程（喪失感、否認、怒り、抑うつ、受容）を理解することの重要性を述べ、適切な時期にケアを導入することが心理的受容を促進することを強調する。続いて、光学的補助具（眼鏡、拡大鏡、単眼鏡、遮光眼鏡）や非光学的補助具（拡大読書器、スマートフォン・タブレットの拡大機能や音声機能、タイポスコープ等）、さらに白杖や点字、コントラスト工夫など生活支援具の活用について概説する。

また、教育や就労支援における工夫、日常生活訓練やスポーツ・趣味活動を含む社会的適応支援の重要性を示すとともに、眼科医、視能訓練士、歩行訓練士、福祉専門職、教育関係者など多職種協働の枠組み「Smart Sight」を紹介する。

超高齢社会を迎えた日本では、地方における医療アクセスの格差や専門人材不足が依然として課題である。一方で、医療現場においても「できる範囲から始める」クイックロービジョンケアの普及が進んでおり、今後は地域資源を活用した包括的支援体制の構築が期待される。

本講演を通じて、ロービジョンケアが「治療ができなくても支援はできる」領域であること、そして医療と福祉の橋渡しにより患者の社会参加と生活の質を支えることの重要性を共有したい。

森 本 壮（もりもと たけし） 先生 ご略歴

1997 年 大阪大学医学部卒業、大阪大学医学部眼科学教室入局
2001 年 大阪大学大学院医学系研究科未来医療開発専攻 博士課程
2003 年 日本学術振興会特別研究員（DC2）
2005 年 医学博士（大阪大学）
2008 年 大阪大学大学院医学系研究科眼科学 医員
2009 年 大阪大学大学院医学系研究科寄附講座視覚情報制御学 助教
2010 年 大阪大学大学院医学系研究科感覚機能形成学 講師
2012 年 大阪大学大学院医学系研究科感覚機能形成学 准教授
2019 年 大阪大学大学院医学系研究科視覚機能形成学寄附講座 准教授
現在に至る。